

発刊のことは

一 国立女子大学と其中に於ける地理科の あり方一

渡 辺 光

昨年八月に、私は十数年に亘る牧人生活から再び教壇に戻り、本学に着任した。その時には、実は、「女子」の大学に奉職するという意識はなく、ただ三十有六年の長年間に本学にあって育英に捧げられた飯本愷之先生のあとを受け継いで行かなければならないのだと云う重責感だけであつた。しかし現実に着任して見ると、本学が「国立」の「女子大学」として、すなわち「国民の税金」でまかなわれている大学として、色々向題になり、またそれだけに考えなければならぬ課題が多いのを知つた。

残念ながら、私にはここでやがましい憲法論を持ち出す程の法律の知識の持ち合せはない。しかし、歴として男女同権が認められており、しかも教育は男女共学を原則としている今日の日本に於て、女子でなければ携はることの困難なような、特殊の取業教育を施す教育機関としてならは兎も角、男女共学で一向差支えない教科内容をもつ女子大学を、「國」を以て設けなければならぬ理由を人に納得させることは、どうみても一寸無理のように思はれた。いま若し戦後の教育制度が、それまでの基盤の上にはなく、明治維新当時のような、全く新しい革命的の構想の上に打ち立てられたとしたならば、本学のような内容の国立女子大学は、家政科、幼稚園科のような特殊のコースを除いては生れなかつたであらう。

しかし世の中のことと云うものは、万争理屈だけで通るものではない。国立女子大学よりももつと筋みちの通らない国家機関が他にいくらかもある。そして現実向題として、一度設置された機関は、一方的の見解で矢鱈廃止できるものでもないし、またよしんば廃止して見ても、果して結果が良いか悪いかの判定は軽々につくものではない。それであるから、要は、このような、向題になつてゐる機関の存廢を繞つての理屈を云い合うよりも、これらを如何に、國家社会にとつて有用有益の機関たらしめるかと云う点に採つてゐる。特にどのような機関に蔵あつて販を奉じ、國民からその運営の一端を託されている一員としては、深く思をこの点に致さなければならぬと考えるので

ある。

現実の問題として、本学にとって、先ず第一に考えなければならない課題は、国立女子大学のあり方である。茲に私が特に、「国立」と断つたのは、何も国家主義とか何かと係り合いを持たせるつもりで云っているのではない。主権者である国民の税金でまかなわれている教育機関である以上は、その関係者として、国民の納税の行くような機関としての使命を果たすことを念願としなければならないと云う自覚を持つべきであるとするを私自身に言い聞かせたためである。もちろん一般的の教科課程を中心とする国立女子大学の存在意義の解明はかなりむづかしい問題であり、未だきびしい世論に対してはおろか、私自身に対してさえも、納税の行くような説明を聞かない。しかし、私は一応こんな風に、自分自身に言い聞かせて見た。

国民が国立のお茶の水「女子」大学に期待するところのものは、決して女子の学術、教育者、技術者、その他の職業人の養成機関としての機能を果たすことだけにあるのではない筈である。若し左様だとするならば、他の一般大学が十二分にその機能を果たして呉れる、恐らく本学に対する潜在又は半ば顕在的の期待は、恐らくは次のようなものではあるまいか。それは、日本の人口の半ばを占め、それなればこそ、その向上なくしては、日本そのものの向上があり得ない日本の女子の水準、しかもそれは他の文化国家に比してどうみても相当見切りのする女子の水準の向上の一助としての使命を果たすことにあるものとする。勿論このような使命達成のために、卒業生のあるものが職業に就くことは好ましいことである。しかしそれは必ずしも必要とするところではない。本学の卒業生は仮令如何なる地位にあつても、身につけた教養、しかもある *discipline* と云う *hard core* を体得している女性として、おのずから国民の基準となり、このことを通して、日本文化の向上の中核となることのできるような女性としての養地を準備していること、このことこそ国民の本学に期待するところであろう。Führer とか Leiter と云うような大それたコンプレックスを持つことなく、社会の *Must* としての女性の輩出、これこそ本学に託された本質的的使命であると信ずる。

つぎに国立女子大学の中にある地理科のあり方について考えて見たい。一体どの国の大学も、それが高等一般教養の基盤の上に、ある一つの学問の分野、すなわち *discipline* を学習者に体認させるという目標を持っていることは共通である。そして大学教育の最初の段階である学部では、*discipline* の程度は、その大要であり、諸論である。従つてその専門家の養成と云うよりも、それを学習の中心 *major interest* とし、その体認を通して正鵠を

得た物の見方や判断力を養成することにある、すなわち広汎な基盤の上に、ある一つの体系科学を *hard core* として持つような、良識ある人士を養成することにある、本当の専門家として立つには大学院に入ってマスターコースを修めればよく、更に学者になろうとすれば、ドクトルコースに進めばよい、

本学は女子大学であるが、大学である以上、上記の基準からかけ離れたものはあり得ない、従ってその中にあつての地理科のあり方も、このような線に沿うべきことは云うまでもない、また本学にあつては、他の学科と同様に地理も大学の規模、教授陣の不足等を勘案して、入学当時より、気候、地質等の多くの専門的教科をも課することになっているが、最初の二年間は重点をメジャーとしての地理の教科よりも、人間形成に必要なと共、地理学習の基盤として不可欠の学科、例えば哲学、論理学、物理、化学、生物、文学、政治、経済、厂史、語学などに力を注ぐことになっている、そして入学後三年目から、はじめて若年では理解の困難な人文地理的、地誌的の学科が中心となる、その教科の種類が多岐に亘るのは、地理の対象が「地域」であり、土地とその上に営まれている人間生活とをその伝統的宿命としており、従つて自然から社会、人文に亘る色々の範疇に属する現象を包含するのであるから当然である、このように、地理は十九世紀後半以後に新しく発生した「科学」と異り、ある範疇に属する現象を対象として成立した学問ではない、

この点林々の現象をそれらの発達と云う面から「時代」焦点を合せて把握すべき厂史とよく似ている、昔からよく地厂と云い慣されているのも、この両者の緊密な相互関係だけからではなく、見方の類似性と云う点からも納得される、

しかし両者の向の違いも大きい、厂史はこれを自然史と人間史に分けて見ると、この両者は一応切り離しても差支なく、それをればこそ、狭義の厂史は考察の対象を人間史に限っている、ところが地理の方は、地域の現状の把握を中心課題とし、各地域の人間生活そのものがその自然の上に、それと緊密に関連しながら展開しているのであるから、両者を切り離して考察するわけにはいかない、つまり自然地理と人文地理とは切り離して考察することができない点に厂史と異なるところがある、そしてメジャーとしての地理の学習は、地域を構成する各主要要素であると共に、相互に深い関連を持つ地域要素であるところの、気候、地形、土壌、生物等や経済、交通、居住、人口等から、政治、文化等に亘る諸要素等についての地誌的意義の把握及び評価の識能がメー前提として要求される、そしてかかる識能を基礎としての

他の地域との比較、関連に於ける地域の総合評価すなわち地誌こそは地理の伝統的の目標である、かくて地理学習は、地域に焦点を合せた立派な一つの「総合コース」に他ならない。

この意味で、地理学習は人間形成を中心とすべき女子大学の学部コースとしても極めて相応しい分野である。

一方女子大学に於ける地理科の存在価値をはっきりさせるためには、一般大学のそれに対して何か特色ある長所を持つことが好ましい。それには色々の方策が考えられるであろうが、その一つとして、私は国際語として通用ししかも地理学習に必要な外国語との組合せを考えて見度、それは、外国語に於ては、女子の方が男子よりも優れた能力を発揮する事例に多く接しているからである。もちろん外国語は地理ではない。しかしそれはその学習の有効な手段であり、特に次の二つの点に於て地理とは切り離せないものである。その一つは、遺憾ながら、地理を含めて人間を中心とする諸科学の今日の日本の水準は、学部の段階の学習に於てすら、日本語だけを以てしては困難であるからである。いま一つのもつと本質的な外国語の必要性は、地理の持つ国際的性格にあり、少くとも一つの地理の充て込国（英、独、仏の何れか）の国語の力を惜りることなくしては、恐らく将来日本の水準が向上した暁にも、その十分な学習は望まれ難いと思はれるからである。そしてまた、この地理と語学との組合せこそは、広い、国際的視野を持つ人間形成と、社会が大学の卒業生に期待しているところの、相当程度の語学力を具えた女性としての資質の涵養に逼る道であるからである。第一学年、第二学年の時に、その十二分の基礎を培かうことを期待する所以である。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

卒業生へ

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

松井 勇

飯本先生と龍先生の後任には、渡辺先生と式先生がおいでになりました。式先生は鶴田好子さんの御主人でお若い方です。集落地理の講義をなさいます。

渡辺先生がおいでになつて、教育の方針が多少変わりました。従来も自然地理を重視した訳ではありませんが、今後はより以上に重点をおくことになり